

## 大会 1 日目 特別講演

### Leslie Hannah 教授の紹介

湯沢 威（経営史学会元会長）

ハンナ教授については、雑誌 Business History 第 61 巻 3 号（2019）がハンナ教授記念号として、教授に関する詳細な紹介を掲載しています。ここでは私の主観に基づき、とくに日本との関連でハンナ教授について紹介いたします。

ハンナ教授は、現在 76 歳で London School of Economics の名誉教授であるとともに、2009 年に Fellow of British Academy (FBA) に推挙され、また現在は東京大学経済学部の visiting scholar でもあります。

ハンナ教授は 1969 年 Oxford の St. John's College に学位論文を提出され、それはのちに、The Rise of the Corporate Economy として出版されました。日本では『大企業経済の興隆』（湯沢威・後藤伸訳）東洋経済新報社 1987 として紹介されています。1978 年にロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (LSE) 内に新設された経営史研究所 (Business History Unit : BHU) の初代所長に就任されました。

ハンナ教授は BHU の所長として、さまざまな研究会、大学院生の受入れなど研究教育活動の傍ら、Dictionary of Business Biography 全 5 巻を刊行しました。イギリスを代表する経営者 1181 名に及ぶ詳細な伝記を収録しています。また 1958 年に Liverpool 大学から出版されていた雑誌、Business History の刊行も引き受け、BHU はイギリスの経営史研究のメッカとなりました。多くの研究者を輩出し、国際交流を進め、各国の経営史研究者が Unit を訪れました。一橋大学の米川伸一氏が 1979 年に BHU を訪れたのをきっかけに、その後多くの日本人研究者が訪れ、和田一夫氏（東京大学）、鈴木俊夫氏（東北大学）などはここを拠点に研究をされ、学位を取得されました。

ハンナ教授は 10 年間にわたり BHU の所長を務められましたが、その間 1984/85 年の 1 年、ハーヴァード・ビジネス・スクール (HBS) に招聘され、アメリカで研究されました。この間、所長の代理を務めたのが、ジェフリー・ジョーンズ (Geoffrey Jones) 氏でした。ジョーンズ氏は現在 HBS の経営史主任教授ですが、ルーツはロンドンの BHU であります。

ハンナ教授の研究は経済学の分野の Mark Blaug's Who's Who (1986-1999) で最も多く引用されている 3 人の中の一人というデータがあります。ネットでは Chandler vs Hannah という比較研究がヒットします。なぜなら経営史研究の泰斗、チャンドラーに最も果敢に議論を挑まれたのがハンナ教授であるからです。具体的な内容に触れることは出来ませんが、その一端は『見えざる手の反逆—チャンドラー学批判』（レスリー・ハンナ & 和田一夫著、有斐閣 2001）で知ることが出来ます。

